

第1章 荒木博之先生を囲んで

目次

第1節 荒木博之先生のお話
第2節 荒木博之先生との話し合い

第1節 荒木博之先生のお話

紹介

甲斐ム 今回は、宮崎公立大学の教授でいらっしゃる荒木博之先生にお話しいただくことになりました。荒木先生を講師にというご要望は、何人かから出ていましたので、是非一度お話をお伺いしたいとお願いましたところ、快くご了承いただきました。先ほどお伺いしたところ、荒木先生は旧制の浦和高校のご出身だということで、赤羽の方もよくご存じでして、私が、研究所が赤羽の近くだと申しましたら、非常に喜んでくださいました。

今日の予定を申し上げますと、これから1時間程荒木先生に、ご自分の考える国語教育の姿についてお話をいただきます。そしてその後で、荒木先生のお話についてのご質問や、皆さんのお考えなどを出していただくという手順で進みたいと思っております。

荒木先生についてのご紹介は省かせていただきたいのですが、実は私は、大学に勤めておりましたときの夏休みの学生の宿題に、新書本を3冊ほど毎年出していたのですが、その中の1冊は常に荒木先生のご本だったのです。荒木先生、どうぞよろしくお願いたします。

赤羽について

荒木 ご紹介に預かりました、荒木でございます。今、浦和の話が出ましたのですけれども、戦争時代、旧制の浦和高校におりまして。そのときは、勉強はほとんどできず、僕より1つ上の人たちは学徒動員で皆、戦争へ行ったのです。僕は1つ下だったものですから戦争には行かずに、赤羽の圧延工場という、機関銃のバネを作る工場にずっと勤めておりました。そのときに僕は、肺浸潤をやっておりましたので、事務の方へ回されました。ちょうど工場が、荒川を挟んで埼玉県側とこちら岸とにありましたので、事務連絡で船で行くのです。船で往復し、櫓を漕ぐことを覚えました。赤羽と聞いたときに、すぐそのことを思い出しまして、高等学校時代のことを思って、宿は東京都内を取るよりは、赤羽、浦和に取りたいと思って、昨日、北浦和の近くのホテルへ泊まりましたのですが、その様変わりにはものすごく、とても昔の思い出に浸るところではなかったのでございます。そんなことで、北浦和、赤羽は通い慣れた道でございました。

私の言語生活

今日は、英語、国語教育ということでございます。今、うっかり僕は英語と言いました。実は私は、本来は英文科を出ております。ただ、英文学やアメリカ文学にはほとんど興味がなくて、文学の発生に非常に興味を持ちました。折口信夫や柳田国男、そういう本をむさぼり読んで、それから大学院を出まして、高知の女子大に勤めまして、そのときから土地の民俗学の方々と、四国の山野を歩き回った。ほとんど勉強もしないで、そのころはただ一生懸命、民俗学に打ち込んでいたわけですが、そういった民俗学への関心、あるいは方言も大変に好きでございまして、言葉への関心も強かったのです。恐らくそれは、僕自身、東京の生まれなのです。東京の杉並で生まれまして、両親も東京で生まれているのです。祖父の時代には、父方が熊本から、母方は小倉から参りました。僕自身、両親も東京の生まれですが、言葉はあちこち回ります。今はどうやら怪しい言葉になっている。大学は京都でしたから、関西弁がときどき出たりもいたします。ただ、僕の言語形成期、小学校3年生から中学5年まで、宮城県の古川というところにおりました。これはササニシキの中心地でございます。父は北大の農学部を出て、稲の品種改良をやって、農林150号というものをつくったチームの一員でございます。それは後にササニシキということになったみたいです。そういう関係で、宮城県の古川へおりました。友達とは、もうパーフェクトなズーズー弁を、古川弁を話すわけです。家へ帰ってくると、両親は東京ですから東京弁を使っているのです。二重言語生活をやっていたわけですが、それが一つは言葉への非常に強い関心になったと思うのです。例えば、古川のあたりでは眉毛のことをコノゲと申します。コノゲと言われたときに、非常に汚らしいものを感じました。言葉が、土地が変われば変わるものだということ、少年時代に既に体験いたしました。いうなれば東北弁と東京弁のバイリンガル。これはすぐに入れ替わるのです。今でも昔の中学校の同窓会に出ますと、パーフェクトなズーズー弁にすぐなるのです。これは妹の場合だと、そうではなくて、もうズーズー弁は忘れてしまったということなのですが。女の子というのは男性と違っていて、なるべく標準語を話したいという欲求が強いようですから、そうなるのかもしれませんが。僕自身は今でも古川弁はパーフェクトに話せるし、理解できる。そういった言葉への関心というものが一つはあったと思います。英語をやる上で、非常に英語の音声に興味を持ったのも、私の特別な言語体験からだと考えています。ところで、中津燎子さんという方をご存じだと思いますが、『何で英語やるの?』という本を書きました。一介の主婦でしたけれども、大宅壮一ノンフィクション賞を取られた方です。僕は今から20年ぐらい前に講談社現代新書から『日本人の行動様式』という本を出しまして、この方が、それを読まれて非常に関心を持たれました。中津さんは盛岡で英語の塾を開いていて、その体験を『何で英語やるの?』という本に綴られたわけですが、そういった言語への関心から、言葉と文化という問題にも大変興味を持っておられました。ご主人がお医者さんでございまして、近畿大学の医学部に転任になったのをついでに、大阪に行かれまして、東大阪発音研究会というものを組織された。現在は未来塾というものをやっておられますが、そこに何回か、日本文化について話をしてくれということで呼ばれてまして、中津さんの、殊に音声訓練のやり方を実地に見ました。中津さんの話を聞いておきますと、あの方はウラジオストックで育ちまして、お父さんがロシア語の通訳だったのです。ロシア語の通訳というのは、外交官と違って領事館の構内にある宿舎に住んでいた。そこは、ロシア語や日本語や朝鮮語や、あるいは支那語が、遠慮会釈なく飛び交うところだったらしいのです。その中で中津さんは、自分とは何なのかということ絶えず考えていたとおっしゃいました。そういった多くの言語に接することが、言葉への特別な関心につながっていったのだらうと考えているのです。僕自身も、古川弁との非常に密接なつながりから、言葉への関心が次第に育てられていったのではないらうかと、考

えているわけです。

視座の転換

それで今日は、言葉を、日本語というものについて、私なりの考え方を申し上げたいと思います。あるいは大変お粗末な話になって、失望されるのを恐れるわけですが。ただ、この言葉を見る視座というものが、いくつかあると思うのです。例えば、萩原朔太郎の散文詩に「猫町」というものがございます。いつも見慣れている町並みなのです。電信柱があって、横町にタバコ屋があって、それからポストがあってというような、変哲もない、いつも見慣れた町に、あるとき突然違った横町から入っていったときに、その町並みが全然、今までと違った相貌を持って見えてきたというような内容だったと思うのですが。視座を変えますという、ものが違って見えてくることではないかと考えるわけです。実は私、今、北九州に住んでおりますが、以前、鹿児島大学に勤めていたことでもございました。日本文化の原点が南島にあるということは、だいたい、柳田国男にしても折口信夫にしても、現代の谷川健一にしても、皆さんが考えていることなのですが、そういった意味で、南島に特に興味を、僕自身も持っているわけです。そういった中で、西郷隆盛が奄美大島に流されたときの島妻に、愛加那という人がおりまして、非常に関心を持ちまして、いつか書いてみたいと思っておりました。そうしたら、たまたま僕が鹿児島に泊まっているビジネスホテルに、一人の女性が訪ねて参りました、紹介者の女性と一緒に来たのですが。そのレストランで初めて初対面の挨拶を交わしましたときに、その女性が「私は愛加那について、愛加那の無念の気持ちについて、どなたかに書いていただきたいと、かねがね考えております。」僕に会いに来たのは別な用事だったのですけれど、突然そういうことを言い出しまして、涙をぼろぼろ流されたのです。愛加那の無念の気持ちと言われまして、いろいろ聞いてみますと、どうもその方は愛加那の血筋の女性なのです。愛加那というのは、奄美大島の竜郷の出身でございますが、その方も竜郷の出身で、血統をたどりますと愛加那に行き着くという方なのでございます。僕が愛加那について書くということを知らないで、そのことを言われたので非常に僕は驚いたわけです。そういうことがこの頃、何回か起こりまして、どうも人と人との出会いの靈的なものがあるのではないかと、しきりに考えているのですが。そのときにその方が「愛加那について書かれるなら、まず奄美大島へ行ってください」と言われた。「奄美大島は何遍も行ってますけれども」と言ったら、「いや、今行ってください」ちょうど冬休みに入った頃でございましたので、行きまして愛加那の墓に参りました。それから名瀬の町へ行って古本屋へ行ったのです。そうしたら、その土地の新聞の「南海日日」という新聞社の社長がおりまして、かねて知り合いなのです。その方とお話をしていました。その方が帰られたら、この古本屋の主人が僕を知っているわけです。「今度はなぜ大島へ来られましたか？」と私に聞くのです。「実は愛加那について、少し調べたいと思って」と言ったら、ものすごく嫌な顔をされました。そこで「実は、今まで鹿児島の、大和の視座から愛加那について考えていたけれども、どうもこれは奄美大島の視座から考えなくてはいけないのではと、思ったものだからやって来たのです」と言ったら、途端に機嫌が直りまして、「実は私は南日本新聞という鹿児島の地方紙ですが、そこに書いたことがあります」と言って、新聞記事の切り抜きを見せてくれました。そこに西郷隆盛の悪口が盛んに書いてあるわけです。それで、愛加那がいかに辛い気持ちだったかということも書いてあったわけです。そういうことがありまして、愛加那という女性の立場を考えてみますと、いろいろなことが見えてくるわけです。例えば、愛加那と西郷さんの長男は菊次郎といって、京都市長をやった人です。京都市長の前は台湾の知事をやっていたわけですが、そのことを知ったときは僕も非常に驚いたのです。というのは、私の母方の祖父は、や

はり台湾の知事をやっております、あとで調べたのですが、菊次郎とほとんど2年半、任期が重なっているわけです。従って、当然これは知り合いであるわけです。僕にその話が来たということも含めて、非常に不思議な気がしたわけです。その菊次郎ですが、誰も菊次郎という名前について何も思わないわけです。西郷さんは鹿児島に帰り、おいとさんという正妻と結婚しまして、産まれた子が寅太郎、寅年生まれです。西郷さんは非常に単純明快な人なので、寅年生まれだから、長男だから寅太郎。菊次郎というのは、西郷さんが大島へ流されたときに、藩の事情がありまして、本名を名乗らずに菊池源吾という名前を名乗っていたのです。それで菊次郎。しかし、なぜ菊太郎でないのかということに、そこで気が付いたわけです、長男なのに。そこに明らかな差別があるわけです。これは、そういった奄美大島という視座に立ちませんと、見えてこないわけでございます。そういった意味で、違った視座を、視点を取りまして、少しお話をしてみたいと思うわけでございます。

私の専攻は？

実は、僕は英文学を専攻して、実際には口承文芸論や、あるいは説話伝承論や、あるいは比較文化論。一番人に言うのは比較文化論です。世間の方は意外と僕を国語の先生と思う人が多いのです。『甌島の昔話』という本が私の処女作でございます、これは非常に愛着が強い本でございます。そのほかにも朝日選書から『やまとことばの人類学』という本を出しておりますし、PHPから『敬語日本人論』という本を出しました、これがその後『敬語のジャパノロジィ』として再刊されたわけですが。そういった本を出しているものですから、国語の先生と世間の人は思っているわけです。実は英文科を出ていまして、長い間、アメリカ文学を高知の女子大や、あるいは立命館大学や、広島大学で教えて、一般教育の英語も教えていたわけです。そういうことで、英米人とのつき合いも大変多いわけです。

「文化」という視座

英米人といろいろお話をしていると、日本人、例えば本屋は、英語でBOOKと書いてある。BOOKSと複数に書いてあるところもあるのですが、単数に書いてあるところもたくさんあるのです。そうすると彼らは、「なぜあれは複数にしないのか、私たちはあれ見ると蕁麻疹が出る」というようなことを言われるわけです。我々は日本語という中にいますと、複数がないことは当たり前でございます、少しもそういうことに気が付かないわけです。しかしながら、違った国の言葉、違った文化に接することによって、違ったものが見えてくるのではないだろうか。従って、複数とは何なのかということ、一生懸命考えたわけでございます。つまり文化という視点を入れますと、言葉が違った展開を、様相を見せてくるのではないだろうかと思うのです。もちろんこれが、一つの文化という視点を入れずに、例えば柳田国男も、民俗学を考える場合に、しきりに「一国民俗学」ということを言ったわけです。要するに国語という立場から日本語という問題を考えるならば、非常にそれは深く、陰影が濃い捉え方が当然できるわけでございますけれども、そこにまた文化という視点の一つ入れますと、違ったものが出てくる。当然、そういった「一国民俗学」というあり方で日本文化を考える、日本を考える、日本人とは何かと考える、日本人のアイデンティティーを考えることは、大事なことで、また、そうしなければならぬわけでございますが、もう一つ、やはり文化という視点も必要なのではないか。

レル, ラレル

例えば僕は、このことは『日本人の行動様式』という本の中から頻りに書き、『やまとことばの人類学』の中でいちばん詳しく書いているのですが、日本語の助動詞のル,ラル,レル,ラレルは、自発,受け身,可能,尊敬を表すのは、なぜなのか。これは、中学校のときに先生に質問して、怒られた覚えがある、「もう、それはそう覚えておけ」と。まさに先生が言ったのは正しいわけですが、しかし、なぜかという思いは常にあったわけです。そのときに、その四つの機能の中でいちばん古いのは何かと考えた場合に、山田孝雄説は受け身、橋本進吉説が自発だということを言っておられます。今度、私の出した『日本語が見えると英語も見える』という本がある。その中にも、図形を描いてございます。『やまとことばの人類学』にも描いてある。これは吉田金彦さんがかかれた橋本進吉説を、図に直したものでございますが、いちばんてっぺんのところに自発がございまして、自発、つまり自然勢がいちばん基本にあって、そこから受け身,可能,尊敬が生まれていったのだということ、図で表されたわけです。私もまさにそうだろうと、今、考えるわけですが、自発を、自然展開を価値とする文化と考えると、そのことが大変よくわかるのではないかと。例えば「なる」という言葉がございまして、「なる」は本来、自発を表す言葉でございます。可能を表しますし、尊敬も表す。例がいくつか、この中にも挙げてはいるわけですが、「そのようなことはなるまいぞ」ということは可能でございます。「上皇安芸国厳島御幸なるべし」というのは尊敬でございますが、こういった本来自発を表す「なる」が、やがて可能や尊敬を表していくように、変化していくわけでございます。自発と受け身といえ、もっとも近いわけでございます。これは釈迦に説法みたいなことを申し上げて大変申し訳ないのですが、分かち難いわけで、可能も実は自発可能であり、尊敬も自発尊敬ではないだろうかと思っているわけです。そしてもう一つ、「できる」という、現代語の可能を表す言葉も、もともと「出で来る」から来ています。「いでくる」から「でくる」へ、それから「できる」に変化していったわけで、「でくる」は現在でも九州で使いますが、この「いでくる」は、自発を表す。それがやがて可能を表して、尊敬を表すかということ、尊敬とまでは行かないけれども、「できる」に価値を置いていることは間違いない。例えば「あの人物はなかなかできた人物だ」や、「お宅のお子さまはよくおできになるそうですね」という価値を与えている、まだ尊敬には至っていないと考えるわけです。そうすると、自発を本来とするものがやはり可能を表し、そして価値を表すというあり方が、まさにレル,ラレルと対応するのではないだろうかということでございます。この話を、中西進さんが主になりまして、アメリカの日本文学者と日本の国文学者とが一堂に会してテーブル会議をアメリカで2回やりました。1回目はロサンゼルスのカリフォルニア大学バークレー校でやりまして、2回目はワシントンのスミソニアン・インスティテュートでやったのです。そのとき、僕はコーヒープレークの時間に「できる」というのも価値を表すという話をしていましたら、神戸大学の野口武彦氏が、「あの若い二人ができてはいるらしい」それも価値ですか、と混ぜ返したので、それは若い男女がいれば、なるようになるのではないのでしょうか。それは自発ではないのでしょうか、という笑い話みたいなこともしたわけでございます。そういった文化の視点を入れますと、ル,ラル,レル,ラレルが自発,受け身,可能,尊敬を表す一つのダイナミズムが、わかってくるのではないかと思っているわけでございます。

日本語になぜ複数がないか

そこで先ほど、日本語に複数がないという話が出ましたのですが、これは、我々日本人にとっては、

ごく当たり前のことなのですけれども、欧米人にとっては蕁麻疹が出るほどカルチャーショックの大きなものがございます。そこで、複数がない言語は世界にいくつあるのか、これは当然問題になるわけです。いつか、霊長類研究所の河合雅雄さん、梅原猛さん等と「創造の世界」という、小学館から出ている季刊誌の座談会に、呼ばれまして出たことがあるのです。そのときに河合雅雄さんが、アフリカのどんな少数部族の言葉でも全部、複数がある。だから、複数がない言語は、非常に珍しい言語だと。これは韓国語にもないわけでございます。そうすると、複数はいったい何なのかということになるわけでございます。たまたま、僕の浦和高等学校の同級生で、医事評論家をやっていた、岡本正という男がおります。彼は会ったときに、僕に訊くわけです。少しは僕が言葉に詳しいだろうというわけで。「子どもに質問されて弱ってしまった」と言う。「何を質問されたのだ」「実は野球のチームだけでも、読売ジャイアンツ、阪神タイガース、太洋ホエールズと、みな-sが付くのに、どうして広島カープだけ-sが付かないのだと、子どもに訊かれてしまって、非常に困ってしまった。おまえはわかるか？」僕も英語を教えたりして、いわゆる集合名詞や、あるいはゼロ複数や、そういった術語は知っているわけでございます。そういう言い方の中に、ポイと放り込んでおいて、それ以上考えなかったのですが、友達からそれを言われて、なるほどこれはもう少し考えてみようということ。実はそれを言われた当時に、僕はある事情がありまして、池のある家に住んでいたのです。その池には鯉が十数匹泳いでいる。縁側に椅子を出しまして毎日毎日、鯉を眺めていたのです。なぜ複数にならないのか。一生懸命考えていましたら、鯉の動きというのは、1匹2匹は岩陰に隠れたりしてサボっているものもいるのですが、もうほとんど一つの生き物のようにして動くのです。ちょうど真真中に島がありまして、8の字のような池だったのですが。回りをぐるぐる回ったり、同じような動きをしているわけでございます。それを見たときに、複数にしないということは、個別化しないということではないか、英語でいうと、*individualize*しないということではないだろうか、ふと考えたのです。それで、個別化しないとは、どういうことなのか。その当時、僕は『日本人の行動様式』という本を書きまして、日本文化を他律と集団論理という、いわゆる鍵概念によって切り取っていたわけでございます。*Webster*の*International Dictionary*というものがあるのですが、その第7版の解説を見ていましたら、非常にびっくりすることが書いてあったのです。それは、例えば「熊」や「狐」、*bear*や*fox*は2つの種類の複数がある。我々が中学や高校で習う場合には、必ずこれを複数にするわけです。*bears*や*foxes*と、-sや-esを付けるわけです。ところが、それを付けないゼロ複数を使う人達がいる、それを使いたがらない人たちがいる。それは、熊や狐の猟をする人達だと書いてあります。それから、鮭や魚を漁る人達も、複数にしないのだと書いてあったわけ。そこで、個性化する、個別化する、*individualize*するということを考えてみまして、個性を与えないことだと。複数にするということは個性を与えることですから、個性を与えると殺すことができないわけ。深層心理的に殺せなくなる。そうすると、複数にしないということは個性を与えないことではないだろうか。つまり、個性を与えては「今日は3匹の熊を殺した」と、熊を殺したり、狐を生け捕ったりということができなくなるわけ。毛皮を作るために狐を生け捕るわけですから。猟をしったり漁ったりする人たちが、例えば3匹の熊を*three bears*と言わないで、*three bear*と単数で呼ぶと知ったときに、はっと気が付いたのであります。欧米の文化は、まずは個性化する文化、個性を与える文化である。日本文化は、個性を滅却する文化。滅却する場合もありますし、個性を認めないという場合もあるでしょうけれども、個性に対しては欧米文化とは違った立場をとる文化ではないだろうか。そうすることによって、日本人、日本語に個性がないという問題が、明らかになるのではないかと考えたわけでございます。日本人は、二つでも三つでも複数にしないわけ。たばこ屋へ行って、どういう気障な人間でも「セブンスターズをくれ」とはまず言わない。「セブンスターをください」しかし、セブ

ンスターを見ますと、「セブンスターズ」と、きちんと書いてあるわけです。これは、欧米人なら言うかもしれませんが、日本人はまず言わないだろうと思うのです。そういった問題も、文化という視点から考えますと、ある意味で答えが出てくるのではないかと思うわけです。

「国語」という言い方

そう考えていきますと、「国語」という言い方でございますが、これは英語にならないのでございます。僕もアメリカのインディアナ大学というところのドクターコースに行っておりまして、それから、客員教授でもアメリカへ行って教えたりするわけでございます。向こうのカリキュラムを見ますと、「国語」に当たるのは、Englishとなっているわけでございます。そうすると「国語」という言い方の中に、日本人のアイデンティティーを考える上で、柳田国男が主張したような一国民俗学という立場は、当然あり得る立場でございますし、そういった立場によって、日本の民俗学が大きな成果を挙げたわけでございます。もちろん「国語」という言い方によって、「日本語」という言い方ではわからないような、それによっては解決しないような問題も当然存在するし、またそれによって大きな成果も挙げられているわけでございます。一遍、その視座の転換というものも、一つのあり方として見てみますと、また違った展開が出てくるかもしれないと考えます。

弟と代りますから

実は私は、広島大学に10年おりましたのですけれども、広島大学時代に一般教育の英語を受け持ちました。そのほかに専門も教えるわけです。専門は比較文化論ということで、学部、大学院を、教えていたのです。そのとき、一般教育の英語の時間に必ず僕がしたことがあるのです。一般教育の英語は、だいたい50人ぐらいがいるのですが、その学生に向かって、「君達が今、誰かと電話で話をしている。すると話の展開の中で、君達の横にいる弟と話した方がいいという状況が生じた場合に、『ちょっと待ってください。弟と代りますから』と言うでしょう。それを英語で何と言うか？」という質問を、ずっと10年間しました。50人のクラスを4コマですから、前期200人、後期200人、400人です。10年間やると、4000人、学生にそれをしたのです。3人ぐらいを指名しまして、黒板に出てきて書きなさいというわけです。4000人の学生、もちろん全員に書かせたわけではありません。出てきた者は誰もできません、学生に向かって「誰かわかる人？」と言っても誰もわかりません。学生はどう書くのかと申しますと、まずほとんどが、I will change. と書くのです。代りますからというのでchangeという言葉を使う。まず、日本人の頭に浮かぶのは、このchangeなのです。そこから、わからなくなってしまうのです。弟と代りますから、そこに前置詞を付けまして、with my brotherや、to my brotherとするのはまだいい方でございまして、I will change my brother. というようなものを書くのです。「今の弟は気に入らないから、弟を変えたい」ということになるのではと思うのですが。とにかくそれが、全くできないわけです。今度、出しましたこの本の中に、その「弟と代りますから」ということを書いているわけでございますが。「弟と代りますから」という日本語をよく見ます、英語とどこがもっとも違うのかといいますが、それは話し手と相手との対話なのです。つまり電話口にいる「私」と、それからその横に「弟」がいるわけですが、電話の相手との対話なのです。ところがそれにも関わらず、この文には「私」も「あなた」もないわけです。「弟と代りますから」というのは、「私」も「あなた」もない、欠落してるわけです。つまり、Iもyouもない、欠落しているわけです。

IもYOUもない言語

このことで思い浮かべるのは、オギュスタン・ベルクというジャパノロジーの学者、東京の日仏会館の館長もしていた、日本学では大変有名な方でございます。この方の著書に『空間の日本文化』というものがあるって、筑摩書房から出ている。東大の先生が訳しておられます。この中に、こういうことが書いてあるのです。これは戦争の一場面ではありますが、昔で言えば野戦病院、そこに医者と看護婦がいるわけです。非常に敵が近くなって、危なくなってきた。そこで医者は看護婦に向かって「あなたは後方に下がらなさい、ここは非常に危険だ」と言うのです。看護婦は「いやです、下がりません」と。医者は「なぜか？」と言うと、看護婦はその医者の顔も見ずに下を向いたまま「好きです」と言ったわけです。フランス語の字幕を見ますと、「ジュブゼーム」「私はあなたを愛しています」と、「私」も「あなた」もあるわけです。そうすると「好きです」という動詞と助動詞で成立する文章は、この世界にあるのかということで、彼は非常なカルチャーショックを受けたと書いてあるわけです。今の「弟と代りますから」という文も不思議な文章でございますが、さらに「好きです」という動詞と助動詞だけで成立している文章がある。いつか私が熊本からブルートレインに乗りまして、食堂車は30分ぐらいしてから開きますので、一番先に食堂車へ行ってお茶飲んでいたのですが、ウェイトレスがお茶を運んできました。そこへ、もう一人のウェイトレスがやって来て、そのお茶を運んできたウェイトレスに「呼んでるよ」と言ったのです。僕にはその状況がわかるわけです。つまり、「その責任者があなたを呼んでいる」ということなのです。しかしそれも、動詞と助動詞だけで成立しているような文章、英語でいえば、恐らくbossです、Boss wants you.「ボスがあなたを欲している。」とでも言わなければならない場面なのに、「呼んでるよ」とだけで文が成立している。そういったオギュスタンベルク氏のカルチャーショック。それから、「弟と代りますから」ということを、4000人の学生が全く言えなかった。この正解は、非常に簡単な、中学校3年生でも言える文章なのですが、『日本語が見えると英語も見える』の中に、54ページに書いてあります。

日本語の自称詞と対称詞

これは「代る」という言い方、つまりこういうことなのです。英語のIとyouとは、日本語ではどういふ言い方があるかでございますが、日本語の自称詞と対称詞は、異様にたくさんあるわけでございます。例えば、英語はほとんどIとyouしかないわけで、時には、meというのはございます。これに對しまして、日本の自称詞は、もちろん「僕」「わたし」「わたくし」「わし」「あたし」「俺」「自分」「こっち」「こちとら」「それがし」「やつがれ」「拙者」「身共」や、地位、立場、性別、時代などによって非常に多種多様であります。対称詞にしても「あなた」「おまえ」「おまえさん」「きみ」「そっち」「そちら」「そちらさん」「貴様」「うぬ」「おのれ」「おぬし」「貴殿」「貴公」や、これまた地位、立場、性別、時代によって千差万別でございます。さらに注目すべきことは、同じ言葉が、ある時は自称詞になったり、ある時は対称詞になったりして、頻りに交代するという言語現象です。「俺」は、現代では男性が同等、あるいは目下の者に対して使う自称詞でございますが、上代から中世にかけては、ご承知のように下位のものに対して使われる対称詞でございます。「われ」は自称詞として、上古以来、現代にいたるまで用いられているのでございますが、中世以後には、目下や身分の低い者に対する対称詞となっております。現在でも大阪など西日本の一部では、「我はそこで何をしとるか」という賤称として使われております。「おのれ」も上古以来、自称詞、対称詞の両役を兼ねた語でございます。『宇津保物語』の「おのれは天上より来たり給ひし人の御子

どもなり」の「おのれ」は自称詞でございますが、『竹取物語』の「かぐや姫は罪をつくり給ひければ、かくいやしきおのれがもとにしはしおはしつるなり」の「おのれ」は対称詞でございます。さらに「手前」という語も自称詞でございますが、「手前に俺の気持ちがわかってたまるか」のようなものは対称詞でございます。このように、自称詞、対称詞が交替するということは非常に珍しい、これは恐らく日本語と韓国語だけだと思います。そういった自称詞と対称詞が交替するということ、あるいは両方とも自称詞にも対称詞にも使われるということは、自我と対自我の根付きがきわめて弱いということではないだろうか。つまり、自分というものが、Iというものが、対者でもない、第三者でもない、あるいは環境でもない、揺るがし難い何かであるとするならば、到底起こるはずがない。さらに自称、対称、他称が「こっち」「そっち」「あっち」などという方向指示値によってなされるという、日本語独自の現象があるわけでございます、「こっちへくれよ」というふうに。それは「そっちでやってほしい」というような、対称詞になるわけです。つまり、自称が揺るがし難い自我であり、対称が揺るがし難い自我に真向かう、これまた揺るがし難く確立している対者であったとするならば、こういうことは到底起こらないだろう。従って、日本語の中では、西欧の自我が動かし難く磐石のように、堅固に排他的に、非妥協的に存在しているのに対して、自己も対者も、そして環境すらも積み込んだ内的世界の中の小さな可変的な、自我とすらも言えないものなのではないだろうか。そういった内的世界の中では、自他の区別はきわめて曖昧でございますから、自他は互いに重なり合いながら、一つの世界の中でつながっているのではないだろうかと思うわけです。従って、この「弟と代りますから」という言い方も、「代る」という言葉にこだわっている間は、「代る」とは「ある者が退いて、その位置、立場にほかの者がくる」という意味でございます。本来は「いつのまにかある状態に移る」という、いわゆる自然展開的なニュアンスを持った語でございます。そういった語にこだわっている限りは、この英語が出てこない。これが、日本人が英語が非常に苦手だという、一つの原因になっているのではないだろうか考えるわけです。従って、僕は日本語を、そういったあり方から、モノローグ言語という言葉で呼んでいる。英語や、インドヨーロッパ語がダイアローグ言語だというのに対して、日本語はモノローグ言語である。モノローグ言語としてそれを位置づけた場合に、また違ったものが見えてくるのではないだろうか考えるわけです。もう一つ申し上げますと、なぜ日本人が英語が苦手なのかということは、今、言ったような日本語のモノローグ性が、一つは大きな原因になっているわけでございます。

対象世界の切り取り方

それからもう一つ、もっと大事なことは、対象世界の切り方が違う。つまり、動かし難く存在する対象物に付けられた、所与の対象物に付けられたレッテルの違いが、言語の違いだという考え方があるわけです。日本語の和英辞典は、まさにその立場をとっているわけです。従って、日本語の一語に対して一語の英語の訳を付けている。これは大変大事なことでありますが、実は今までほとんど指摘されたことがないわけでございます。例えば、「りりしい若者」この「りりしい」を引きますと、和英辞典はbraveや、valiantや、それからmanlyや、「おとこらしい」や、「勇敢な」と、そういった訳を付けている。でも、りりしいとは、どうもそうではないわけです。りりしいというものの属性を考えてみますと、それとは違う。そういった大和言葉、擬態語擬声語を含めて、大和言葉を英語に直すには、日本語というのは非常にファジーな言語、つまり対象世界をファジーに切り取ることである。言語の違いを付けられたレッテルの違いだという考え方に対して、そうではないと。言語の違いとは対象世界の切り取り方の違いだということ。これは鈴木孝夫さんが『言葉と文化』という本の中

で、非常にはっきりした形で言われた。あの中で引かれている、"A bearded lips just open."「髭の生えた唇をちょっと開いて」と。唇に髭が生えてるはずがないのに、これはいったいどういうことか。つまり「くちびる」という大和言葉によって示す言語空間は、女性が口紅を塗る粘膜質の部分である、ところが英語のlipsは違うのだということをおっしゃったわけです。僕は僕なりに、いろいろな辞書を調べましたら、非常に面白いことが書いてあったのです。lipsとは「唇を尖らかして尖る部分」と書いてある。そうすると、唇を尖らかしてみますと、日本人が「鼻の下」と言っている部分も尖ってしまうわけです。従ってここに髭が生えているのは、ちっともおかしくないわけでございます。そうすると非常に具象的なものまでも、実は切り取り方の違いが言語の違いの一つのファクターになっているということがございまして、動かし難く存在する所与の対象物に付けられたレッテルの違いが言語の違いだというあり方は、必ずしも正しくはないということが言えると思うのです。そう思って大和言葉を見ますと、りりしいというのは、全然違うわけでございます。国語辞典が役に立つかと申しますと、役に立たないのでございます。「りりしい」を見ますと。話が非常に飛びまして申し訳ないのですが、大和言葉や、擬声語、擬態語、オノマトペを英語に直す場合には、日本語は対象世界を未整理なまま、ファジーなままに切り取った言語である。それに対して英語は非常に論理的、分析的な言語なのです。私の本を読んだ読者から、こういう質問が来しました。「英語の辞書を引くと、ある言葉に対して意味がたくさん書いてある。荒木さんは、日本語は非常に多義的な言語であり、英語は一義的な言語であるとおっしゃっていますが、英語も多義的ではないのですか？」という質問がありました。これは違うのでございまして、もちろん英語の辞書を見ますと、そこに訳がたくさん書いてある、10ぐらい書いてあるわけです。私の言う意味は、ある文脈の中では英語は一義的、分析的であるということなのです。ところが日本語の場合には、ある文脈の中ですら多義的であるということを、私は言っているわけでございます。そうすると、英語が一義的、分析的な言語であるという認識に立ちますと、少なくとも大和言葉は、2語か3語で英語で言わなくてはならないのではないだろう。この、今、例に出しました、「りりしい」も、国語辞典ではなかなかわからない。それで、いろいろな辞書に当たってみる。日葡辞書を見ましたら、「非常に生気がある」と書いてある。なるほどと思ったのです。「りりしい」というのは、nobleで、そして魂が高揚している。英語で言うとhigh-spiritedという言葉がありますけれど、brave and high-spirited「高貴で魂が高揚している」という訳を付けると、これはかなり日本語の「りりしい」に近くなると思ったわけでございます。そういった日本語のあり方を、英語を鏡にしながら考えますと、違った局面が見えてくるのではないだろうかと考えているわけです。

異文化適応とimmersion program

近頃、異文化対応ということが非常にいわれているわけございまして、いじめの問題も、一つは異文化、違ったものを理解するかしないか、許すか許さないかという問題と関わってくるだろう。例えば、山形県の新庄中学校で、簀巻きにされて殺された中学生がございしますが、なぜあの子がいじめられたかと申しますと、あの子が東京弁をしゃべる子だったのです。つまり、山形というズーズー弁の地帯で東京弁をしゃべる。このことは僕自身にもあったと思うのです。小学校の3年生から僕は古川へまいりました。しかしそのとき、非常に正義感のある男がいて、腕っ節が強くて、多分僕をいじめようと思ってかかったのがいたのかもしれませんが、その友人が守ってくれたという気もするのです。そういった異文化対応を考えますと、今アメリカで行われているimmersion programというものがある。immerseとは「浸す」ということ。日本語に浸す授業というものがある。これは実はカ

ナダで始まりました。カナダはご承知のように、英語地帯とフランス語地帯でございまして、英語地帯の人たちはフランス語が話せないのです。カナダはフランス語がほとんど公用語になっていますから、英語地帯の人たちは非常に困る。そこでフランス語を習うのに、フランス語漬けの授業をしようということで、算数や理科。算数は式がございすけれども、理科も物がございす。そういうものをフランス語で教え始めて、非常な成果を挙げたのです。それをアメリカが取り上げまして、今、アメリカの東海岸で、日本語、スペイン語を中心とするimmersion programというものがあります。算数、理科、もう一つありましたが、そういうものを日本語で教えるわけです。日本語漬けの授業をするわけです。子供たちは、初めは何のことかわからない、いわゆる沈黙の時間が3カ月くらいあるのですが、やがて先生の言うことがわかってくる。その言語を習得するプロセスが、ちょうど幼児が母親から言葉を習っていくプロセスと非常によく似ているといわれているわけです。だからこの場合は、日本語を教えるのではなくて、日本語で教える。従って、文法的な誤りはいっさい直さない。そして、英語もいっさいその授業の中では使わない、ということでございます。

第2節 荒木博之先生との話し合い

『日本語が見えると英語も見える』のねらい

甲斐ユ 『日本語が見えると英語も見える』というご著書については、昨年末の毎日新聞の「著者インタビュー」という欄を見て、私は、初めて存じ上げて、大変に面白そうな本だと思って手に取ることができました。この副題として「新英語教育論」というのが付けられておりますけれども、先生ご自身はこの本をお書きになるときに、母国語教育としての国語教育についても、何かこうしたいというお気持ちはあったのでしょうか？

荒木 むしろ英語教育ということを考えて書いたのです。国語教育というよりは英語。そうすると、日本語のあり方を知らないと、英語教育もうまくいかないのではないだろうか。方向としては、英語教育を考えるために日本語を考えるということでございます。

甲斐ユ ここで、先ほど冒頭で紹介していただきましたような、中津先生、それからまた引用されているのでしょうか、エピソードが紹介されていて、大変面白いと思うところがあったのです。例えば、中津さんが「大根の絵を描いてごらん」と子供たちに言ったところ、子供たちは何を描いていいのかわからない、お手本がなければわからないというようなことが、エピソードとして語られていました。今日の国語教育でも、あったことを書いてごらん、体験したことを書いてごらんということが行われていて、そのままではうまく行かない、何とか手だてを講じなければいけないということが、だいぶ前から言われてきているわけですが、そのときに、どうしたらよいかという考え方の手だてとして、ここで展開されている中間日本語的な発想法も、大切になってくるのではないかと私は思ったのです。そういう切り口で、国語教育も、もう少し中間日本語という考え方を導入したら手応えのあるものになるのではないかという、見通しみたいなものはございましたでしょうか？

荒木 僕はこの本の中でも書いているように、日本語とは、実は未来言語的な一面を持っているのだ。つまり、コンピュータも、分析的、論理的に切り取っていく切り取り方はもはや時代遅れで、

ファジーコンピュータというものが出てきている。そうすると、日本人は対象世界を実はファジーなままで切り取っているということは、むしろこれから言葉のあるべき姿を示しているという一面もあるのではないかと、考えていたわけです。そういった意味で、中間日本語とは、我々日本人は対象世界を分析的、論理的に切り取る切り取り方が非常に不得手なわけですから、そういった切り取り方を訓練することが、そのまま英語を使いこなせることに通ずるだろうと、一応は思っているのです。しかし、対象世界を未整理なまま、ファジーなままで切り取っている日本人が、そういう訓練をすることによって、どういう結果が生まれるのかについては、若干の危惧も持っているわけです。

中間日本語

甲斐ム その中間日本語について、読んでいない人のために、もう少し説明していただけますか。

荒木 はい。つまり中間日本語とは、先ほど例に挙げました「りりしい若者」あるいは「ふわふわの布団」いわゆる擬態語擬声語、オノマトペは、そのままでは絶対に英語にならないわけです。家内はしょっちゅうオノマトペで話しているから、家内が言うたびに僕は、それを中間日本語に直す練習をしているのですけれども、我々は実によく使うわけです。そうすると、そのままではそれは、直ちには英語にならない。「ふわふわ」というものの属性を、挙げないといけない。柔らかい、軽い、気持ちがいいなどだと、すぐ、soft, light and comfortableという英語になるわけです。それから「りりしい」にしても、「高貴で精神が高揚した」と言い直せば英語になるわけで、「りりしい」がそのまま右から左に英語になることは、絶対に不可能なのだ。我々はそこで躓いてしまっただけで、英語にならないで、もごもごしているうちに話が進んでしまったことを「日本人は英語下手だ」となってしまうと思うのです。中津さんの言葉にいわせれば、最小限整理された、英語に直すことのできる日本語を、「中間日本語」と。これは、東大の言語学の国広哲弥さんがつけてくれた言葉だそうです。大学の先生の中に中津シンパというのが3人おりまして、国広さん、参議院議員の国弘正雄さんと僕です。

高木 中間日本語ということで、もう少しお伺いしたいと思います。中間日本語というものは、英語を勉強したり習得したりする時、翻訳の過程で有効性を持つということなのか、それとも、日本語を英語的な、もう少しきっちりした論理的、分析的な言葉遣いをきちんと心がけるべきであるとお考えなのか、その辺についてはいかがでしょうか？

荒木 はい。僕は中間日本語になおした場合、今、言ったような「ふわふわの布団」というようなものは、そういった柔らかな布団を捉える捉え方としては、すばらしいと思うのです。中間日本語になおして「軽くて柔らかくて気持ちがいい」と直せばそれに近くなりますけれども、「ふわふわ」そのものではないわけでございまして、これはやはり、そういった論理的、分析的な説明をするための、あるいは英語に直すための、1つの便法としての言葉であって、それが言語として最上の言語だとは少しも思っていないのです。

英語と日本語の計算法

甲斐ユ もう少し今のことに関係してですけれども、今度は算数や理科の授業を英語でやっているというのは、算数や理科の論理性と、英語やフランス語の、一般に言われる論理性というものを、日本語でやるのとはまた違ったような、言語の違いがむしろ学問自体を理解する上での、有効性みた

いなものがあるということもお考えになるのか。それとも、英語が目的のための算数、理科ということなのでしょうか？

荒木　そういうことではないのです。やはり数え方に文化が前提としてあるわけですが、算数や理科を英語で教える、違った言語です。英語でなくてもいいのですけれど、しかし今、英語は世界共通語としての性格を持っていますので、どうしても英語を習得する必要は、今後は国際化の中で出てくると思います。その中で、算数を式がある、理科は物がある、それで教え易いということがあるわけです、確かに。ただそういう物を、算数や理科を学科として教える以上の意味を持っているだろうと思うのです。例えばおつりの数え方もアメリカあたりを旅行されるとおわかりになると思いますが、ある物を買って、680円です、680円払うのに千円札を出したとする。向こうの人達は、品物を680円と数え、それに足して行って、1000円にするという釣りの出し方をして、日本人はびっくりするわけです。そういった思考のプロセスの違い方、物への考え方、それもやはり言語を習得している過程の中で、あるいはnative speakerの話し方の中で、子供たちはそれを体得していくだろうと考えております。ただこのimmersion programというのは、カナダで非常に成功しまして、アメリカでも成功して、シンポジウムも開かれ、一つの理論として成立しているわけですが、やはりまだ学問のあり方自身としては、そう古いものではございません。これからかなりimmersion programのあり方についても、教育に関わる人達が考えていかなければならない場面はたくさん出てくるだろうと予想しております。

Immersion Programのあり方

寺井　もし、例えば、今の足し算のおつりの数え方にしても、英語で低学年から教えたとして、英語的な発想法で考えるようになる。日本語にも当然そのおつりの数え方に関する論理があるのですけれども、英語で教えてあるときに、その日本語的な論理は、一体どうなるのだろうという危惧も持つのですけれども、その辺に関してはいかがでしょうか？

荒木　これは日本人ですから、常日頃、日本語を使っていますし、両親、兄弟、友達、みんなそういう日本語の論理でやっているわけです。だから、そこへ違った論理を持つ考え方がやってきても、違ったものがあるのだということを、子供たちは身を持って知ることが大事なので、それによって日本語の論理性が崩れる、あやふやになることはないと思うのです。というのは、加藤学園は、regular classと、immersion classと二つに分けております。regular classは全くそういうことをしていないのです。算数も日本語で教えている。immersion programでするclassがあつて、算数の試験をしますとほとんど差がない。むしろimmersion programをした方が、若干よろしいという結果が出ているようです。だから、そこで我々が身につけている日本語の論理性が崩れるということはないと思うのです。幼児に英語を教えることは流行っておりますけれども、僕はこれは非常に反対でございます。小学校5年生ぐらいになるといいと思うのですが、小学校1、2年生の段階で、いわゆる言語中枢が未成熟なときに、違った言葉を教えるということは危ないものなのです。このimmersion programは、どういうものかと申しますと、例えば、英語の間違いをいっさい直さないのです。文法が間違つて、例えば三人称単数に-sを付けなくても、「それは三人称単数に-sを付けなければダメです」ということはいっさい言わない。もう、子供が喋るままに放っておくのです。ちょうど幼児が母親やその周辺から、母国語を習得していく同じようなプロセスで、言葉を覚えていく。3カ月間はsilence periodという「沈黙の時間」というものがある。初めからもう日本語をいっさい使わずに、英語でいきますから、子供はポカンとしているわけです。そういう期間で、

式がありますし、ものがあるから少しずつ理解していくのです。3カ月を過ぎると話をし始める段階が来るのです。そういったものをよく観察しながら、行われているような気がいたします。

寺井 それにもう一つ関連して。日本語でも、というよりも母国語でも、例えば、理科の先生が国語をしゃべりながら理科を教えている。イギリスの昔の本に、英語を話す教師はみんな英語の教師だと。だから要するに、他教科でも英語を話して授業をするからにおいては、それは英語の教師であるという有名な文言があるようです。そういう論理をもし使うとすれば、理科を教えていても、その先生は国語で教えている限りにおいては国語の教師である。そのときに、immersion programは、外国語を持ち込んで、その外国語の勉強をさせるわけですが、理科の中に国語教育を持ち込み、あるいは国語教育的なトレーニングをすることが、先生のimmersion programに関するご知見から見ると、可能かどうかというのはどうでしょうか？

荒木 理科を教える人も、例えば日本語で教えれば、国語の教師であるという言い方は、もちろんあり得ると思うのです。でも英語で教えるのは、たくさんある学科の中の、そういった理科、算数、コンピュータです。はじめは社会も教えていたみたいですが、どうも難しいということでやめるそうです。その三つは、ほとんど物があるわけです。これは、例えばコンピュータも英語で覚えていきますと、非常にインターナショナルな方になるでしょうし、他の日常生活、あるいは他の学科は全部日本語ですので、ほとんど心配ないだろうということです。

寺井 例えば理科なら、『理科系の作文技術』という本があったりします。情緒的な側面を押さえて、論理的に語るというような意味あいの、コミュニケーションの取り方をするような気がするのですけれども。必ずしも国語教育ではそういう面は、あまり具体的な場面としては出てこないもので、そういうものの活用は可能でしょうか？

荒木 そうですね。僕は理科のことはよくわかりません。社会科は無理だと思うのです。その必要もないでしょう。算数と理科に関しては、充分、効果が上がるし、加藤学園は、6年生ぐらいになると、日本語と英語がほとんど同じぐらい喋れる子ができるだろうと言っているのです、これは果たしてどうかわかりませんが。しかし3年生の理科の時間、僕はこの間、行ったときに見ましたけれども。もう実に、先生の言うことも全部理解しているし、どんどん手が挙がりますし、非常にその授業をこなしているという印象を受けました。

甲斐 そうすると、今の、例えば中学の英語の教育のあり方ですけど、英語を英語として教えているが、加藤学園の場合には、英語はあることを教えるための伝達上の手段として学んでいって、その方が効果を上げているということになるわけですか？

荒木 結果としてはそういうことです。

甲斐 そうすると、中学以降の英語教育も、そのように考えられるということですか？

荒木 恐らく、どういうことを加藤学園が考えているのかは知りませんが、僕自身は今、こういうimmersion programが、例えば今後、注目されて文部省が取り上げても、ずいぶん先の話になるだろうと思います。それで僕が実験的に、実は言語文化研究所のようなものを作って、実際にやってみようと思っているわけです。それは中学2年ぐらいまで引っ張っていき、やはり英語を読むということです。読むことに力を入れながら、中学2年ぐらいでバイリンガルみたいに話す子どもたちがいても、国語ができるとは、英語ができるとは限らないわけです。もう話すことが出来ても。だから実際にそれを言語として習得するのは、また別な手続きがいるわけですから、十分に考えながらいかないと、危ないことになってくると思います。

日本の国語教育研究の閉鎖性

安 先ほどの先生のお話で、「一国民俗学」というお話が出ました。私どもがやってきた国語科教育も、どちらかというところ「一国民語科教育」というか、ずっと自分達の中で考えてやってきていると、歴史的にもそういう側面が強くてございます。それはどうしても、やっている国語の教師が、自分達の教わった教わり方で、また教壇に立ってそれを続けて、それがまた再生産されていくという、ある意味で閉塞的な循環が行われています。それでどんどん進化していく部分もありますが、先ほど出た中間言語的な視点、もっと具体的にいうと、指導内容、そういうものがどこか閉塞を崩して、将来、例えば英語でも日本語でも、言語一般へと広がっていくような言語の見方を身につけることで、中間言語という物の一つを、勉強をさせていただきます。他に何か、国語科教育でこういうことを指導が出来ないかという注文があったら、お聞かせ願いたいのですが。

荒木 一国民俗学というあり方で、柳田国男自身は、大きな成果を日本民俗学の上で挙げて、未だに日本の民俗を語るには、大きな存在としてあるわけです。それと同じような意味で、やはり国語教育のあり方は、逆にそういった一国民俗学的な、一国民語的な視点を取ることによって、非常に大きく深められた部分があるだろうといえます。と同時にもう一つ、それを日本語として捉える視点は、やはり必要だろう。これは、今までの国語教育のあり方を変えるのか、あるいはそれを日本語として考える、一つの別な視点を持った教育方法を別個に打ち立てているのか、その辺のことは僕はよく分かりませんが、ただ、少なくとも、そういった視点を持った日本語に対する対処の仕方は、日本語を考える上でも、今後、是非やっていただきたいと考えております。

モノローグの言語とダイアローグの言語

寺井 さきほど、呼称の側面から、日本語がモノローグの言語で、欧米がダイアローグ言語だというお話だったと思うのですが、それをさらにコミュニケーションというあり様と、やはり日本と欧米とは違って来るのではないかと思います。今、例えば、ダイアローグ的なものとモノローグ的なものとが、要するに日本の中においてもコミュニケーションをするような、日本人においても、対話的なコミュニケーションのあり様を得意とする方がどんどん増えてきているような気がします。今、国語教育などでは、ディベートという方法を取り入れてコミュニケーションのあり方を訓練させているのが、非常に流行になりつつあるのです。けれど、それが本当に日本人の文化に根ざしたコミュニケーションのあり様を鍛えることになるのか、あるいは全く異質なものを取り込もうとしているのではないかという辺りがわからないので、先生目から見られた、これからの日本人のコミュニケーションのあり様の変化や、あるいはそれに対する教育的な働きかけについて、何か案があれば貸していただけないでしょうか？

荒木 日本語というものは、前に言いましたようにこの本の中でも、川端康成の文章とサイデンステッカーの訳と比べまして、非常に短い間にサイデンステッカーの訳は、Iやyouや、itを、23回も使っているわけです。そういったものなしで対話が進められているのは日本語の特徴なのですが、それは僕は、日本の基本的な生業経済、東アジアでもモンスーン地帯の中の稲作耕作文化と関わる。そういった民族文化は、たくさんありますけれど、日本の場合もっとも特徴的なのは共同体の構造だと思うのです。お隣の韓国を見ましても、共同体はもっと開かれた共同体ですが、あその場合は、本願を同じくする名字の人は結婚できないということになりますので、通婚圏もかなり広がっていく。日本の場合は、きだみのるの『気違い部落周遊紀行』を読んでみましても、東京都の青梅の近くの農村地帯でも、97%の人が村内婚なのです、あの時代で。それから非常に閉ざされた

共同体、その中では、共通事項が非常に多い。お互いに共有しあっている部分が多いわけです。そうすると、共有しあっている部分は省略してしまうわけで、僕は国文学の方々に前にしてこういうことを申し訳ないのですが、『源氏物語』は僕らが読んでも非常に難しいわけです。ところが、源氏よりももっと古い『日本霊異記』の文章は非常によくわかり易い。そうすると、源氏は、宮廷文学といえますか、宮廷の中でお互いにわかり合っている部分が非常に多くて、その辺はもう全部省略してしまうものだから、今の我々にはわかりにくい。日本霊異記は、これは仏教の説教の台本みたいなものですから、そういった共同体を前提としないわけで、今の我々が読んでもわかるのです。共同体の中にいますと、そういった省略部分が多いし、声を大きくする必要もないわけです。中津さんが、その音声訓練の中で、英語は腹式呼吸で発声することが、いちばん大事だというわけです。日本語は、呼吸も息も出さずに、唇もペロも怠けていて音が出る。ところが英語は、息も唇も緊張させる、舌もきちんと動かす。そういった音なのだ。例えば、英語のswitchを日本語で言いますと、息も何も出さずに発音できるわけです。「スイッチ」と。ところが英語で出すと、息を出して"switch"という。音もズツと、息も出ますし唇も緊張するわけです。だから、前歯が接ぎ歯だと、英語で言ったら、接ぎ歯が飛んでしまう。そういった、人を説得する必要があるから、大きな声で言わなくてはならないし、論理性も必要になってくる、それから、省略部分も全部省略しないで言わなければならないというあり方があるわけだと思うのです。日本人が世界一社交下手だと言われるのも、日本という共同体の中では、社交は全く必要がないわけだからです。欧米の社会では、相手を効果的に説得することが非常に大事で、高校の時代からeffective speakingという、効果的な話し方もするわけです。そういった、本来的な日本語と英語とが、本質的に持っているあり方がありますので、そのあり様を頭に置く必要がある。さらに、時代が、非常に国際化という方向に向かってどんどん動き出しているわけですので、どうしても国際化という文脈の中で自分も発言し、相手の発言を聞くことも大事になってくると思うのです。そういった中で、やはり相手を説得する術や、あるいは論理的、分析的に自分の考えを述べる訓練は、必要になってくるだろうと思うのです。そして、ことに英語で物事を、自分の考えを述べる訓練として、やはり中間日本語というあり方が注目されなければならない。中間日本語を作るのは、容易な業ではないわけです。北九州大学の大学院で教えていたとき、アメリカの女の子が僕の弟子だったので、一緒に作ったのですが、瞬時にして出来るものもあるのです。例えば、「ほっかほかのごはん」というのは、steaming hot riceと、即座にできるわけです。ところが、なかなかできないものもあるわけです。従ってこれは、辞書を作ってやりますと、非常に役に立つだろうと考えております。

外国語教育のあり方

水谷 お話を伺っていて、本当にたくさんのごこと、お伺いしたいことがあるのです。今の中間日本語のことに限らず、日本語を外国人に教えておられますと、どうしてもそれが必要になることが多いわけです。人によって置かれた立場によって、すぐ英語で何か与える人もいますけれど、そのimmersion的な、直接法的な立場で教えている場合は、いやでも日本語で勝負していかなければならない。そのときに学習者の頭の中にある、例えば英語で発想しやすいような言葉へ、その「あたたかい」なり「あつい」なり、「ごはん」というようなものがパッパッと出てくる教師は、学習者を引っ張って行くことが非常にうまい。そこから離れている生の日本語で、何回も繰り返しても、少しも入っていかない。英語で何かズバリいちばん近そうな、辞書的なものを与えると、今度は誤解を生じてしまって、そのあと失敗して自信を失っていくということがあり、すごく大切なことな

のです。辞書みたいなものが本当はできているといいのですが、いまのところできていないのです。その中間的なものを探していくときに、対象物の事柄や事物の整理の仕方に関するものの方は、かなり努力をすれば出来そうな感じがするのですが、もう一つ、対象を捉え、捉え方、話し手の、言葉の使い手の価値観や人間観や社会観、そちらの方がこれから先少し難しいのではないかという気がするのですが。両方絡み合っている感じがします。そういう問題があるのですが、急いでやらないと、日本中で大迷いをしている可能性がありますので、大事だと思って伺っていたのです。それから、immersionの方では、変なことを思い出しました。英語によるimmersionの教育の前に、先生がさっき、5年生ぐらいになったらというお話があったので、僕は大賛成なのです。自分自身は、小学校の1年生、2年生の時には、理科と算数の授業がありませんでした。先生も、多分そうだったのではないかと思うのですが。3年生で、僕は国民学校に切り替わったものですから、そこで制度が変わったのか、何学年までなかったのか、よく知らないのですが、少なくとも1年生、2年生の時は、算数、理科がなく、国語の教科書の中に理科的な素材が入ってしまっていて、それで勉強したような気がする。多分、今、考えてみますと、あのときの、恐らく哲学としては、子供の柔らかいうちに、言葉と理学的、自然科学的なものとの結びつきを一貫させてやるという考えが、もしかするとあったのではないか。それで、あるところまでたいた上で、次の段階へいく。もし、今、英語の問題を入れてくるとすれば、そこへ位置づけできるのかもしれないし、だからimmersionの、わかっていないことがいっぱいあって、言語形成期のどこまでいったら固まり得るのか、いちばん効率的か、日本の人口のどれぐらいがそこへ移り変わってもいいのか、国際化するというところで、国際化の激しい世の中だから、英語ぐらい出来るようにならなければ困る、とつい言ってしまったりしてまた叱られるのですが、説得できる材料がないのです。今の、どうも日本の国内の実態は、国際化の必要性を感じていない。もしかすると、必要だとみんなが言っているが、本当には必要だと思っていない状況ではないか。だから、これぐらいの必要性が、このあと何年かのうちにこういうふうが増えていく、これを越すとみんな食べられなくなってしまうというデータが裏にないと、教育の制度などに関する発言はできないのではないか。だからもし、そういうデータがあったら、Immersionの外国語教育でも英語だけでなく、ほかの中国語なり韓国語の問題もあります。

荒木 むしろ、日本人が習い易いのは韓国語です。

水谷 はい。その辺との問題があります。ほかの言語と事物、自然科学での事柄や、社会的な事象についての概念との関係で、言語の教育の全体の大きな青写真づくりみたいなものを、できるだけ早く、次の指導要領の改訂の前に、ここのチームで素案、ヒントでも提言できたら、次にダメでもその次には手を打ってくれる方向が出来るのではないかと考えているのです。

荒木 僕も実は、今のいじめの問題と関連して言っているのです。というのは、いじめとは、村八分と非常によく似ておりまして、いじめ対策の中に、民俗学者が入っていないのは、非常に残念な気がするのです。つまりいじめとは、ジャーナリズムにしても、みんなが裁判官や検察官の立場でものを言っている。それが実は、自分たちの問題なのだということなのです。例えば、私は『日本人の行動様式』という本を書いたときに、わざと農村地帯に住みまして、あわや村八分になりかけたのです。家内が。子供がそのとき小学校1年生で、マラソン大会がありまして、お母さん方が汁粉を作るということで駆り出されたのです。お母さん方がエプロン姿に着替えたなら、全員が白いエプロンをしていた。その中で一人だけ赤いエプロンをしていたお母さんがいた。うちの家内は水色のエプロンをしていたそうです。うちの家内は、常日頃、僕がそういう文化の問題をいっていますから、そのままいたのですが、赤いエプロンをしたお母さんが、全員が白いエプロンをしていたのを見て顔色を変えて、近くの農協ストアへ走って行って、白いエプロンを買ってきたのです。

つまり全員が白いエプロンでないとうまくいかない、仲間外れにされる部分があるわけです。そういった違ったものを「異文化」という、それは文化ではありませんけれども、違ったものも、違ったものとして認めるというあり方が、どうも日本の文化の中ではありにくいのではないだろうか。immersion programは、そういった意味で異文化対応に非常に役に立つ。声を高くしていきますと、immersion programが理解されていくのではないかと。今度、僕が実験的にやろうとしているのも、そのことをいちばん強調して言っていることなのです。英語を話せないから国際化できないということではなくて、国際化の時代の中で、自分達と違った価値を持ち、違った言語を持ち、違った文化を持つ人達がいるのです、ということの子供に身を持って知らせることの方が大事なのではないだろうか。そういった異文化を排除する文化のあり方は、私達自身の問題なのです。僕はこの間、高知の女子大で集中講義に呼ばれましたときにその話をしたら、新聞社が聞きつけてそれを記事に取り、高知新聞には大きく載ったのですけれども。それは決して自分達が裁判官であり、検察官ではなくて、自分自身の問題としなければいけないのだと強調したのです。

一斉教育と個別の教育の関係

水谷 immersion programの実態はよく知らないのですが、知りたいと思っていますことの一つに、とかく私ども、私自身も、一斉にやる教育、全部一緒にやるものと個別の教育が、何か概念としてはっきりバラッと分かれてしまっていて、グルーピングという段階、中間言語ではありませんけれども、中間段階の発想がないのではないかと。もしimmersionのprogramでうまくやるとすれば、先生と子供の関係だけではなくて、何人かの子供を含めたような、組織だての支えがないと、うまくいかないのではないかと。いじめの問題でも、私どもも確かにいじめはありました。新聞に出ているような程度のこと、ごく普通にありました。ところがそれが悲劇的にならなかった理由は、地域社会のあり方も一つはあったと思うのですが、ダメな奴がいたり、いじめられているのがいると救う者が必ずいて、こちらからやられるとこちらからは助けるという、グループの拮抗関係があったような気がする。だから、一人一人を大事にするという非常に個別に対応した見方と、全部一斉にと、極端に分かれてしまうような、その前提は多分、全部一色にというものがあるからだと思うのです。何か組み立て方の、有機的に動いていく、さっきおっしゃったファジーのもとにあった、ファジーといえども何らかの類型があって機能していたのではないかとこの気がするのです、加藤学園がどうやっていらっしゃるか、すごく興味があるのですけれど。

荒木 確におっしゃるように、いじめるグループがいればそれを助ける。僕もその助けるグループに助けられたわけです。ただそのいじめグループの暴力が非常に強大な場合。僕が『敬語のジャパノロジー』という本の中で、もともとこれは山本七平さんが書いていたことなのですが、フィリピンの収容所の問題です。戦争の初期は、オランダ人や英米人の捕虜収容所があって、戦争の末期には、今度は日本人が捕虜になったのです。その2つを対比的に書いておられました。日本人の捕虜収容所とは、これは将官や将校は別なのですが、兵や下士官はみんな一緒にされた。その兵や下士官のところで起こったのですけれど、まず何が支配したかということ、暴力なのです。暴力団みたいなものがいて、全部仲間で自分の周囲を固める、牢名主です。それに反対するものは、ほとんど死ぬぐらいやられる。それが、一つの収容所だけではなくて、シベリアでも同じようなことが行われた。英米人の収容所は何が起こったかということ、組織を作ることから起こったのです。いろいろな警察、衛生、風紀、厚生、防火委員会などを作って、そして最後には裁判所まで作った。山本七平さんがいうのは、決して日本の捕虜が劣悪で英米の捕虜が優秀だったというわけではない。英米

の捕虜の中には、中国辺りから流れてきたような娼婦や、いろいろないかがわしい者もいた。彼らは日本人がマイホームを作るのに一生懸命のように、マイ組織というものを作る習性を持っているのだと言っている。そういった集団の中で、暴力が支配するという構図は、律するもの、つまり軍隊の立法が機能しているときには、絶対に起こらない。それが、戦争に負けてその立法がなくなったときに、結局、暴力。今の学校で起こっていることは、立法がほとんどないわけです。もう律するものはなくなるものだから、結局、暴力ということになるのではないか。そういった意味でも、異文化対応としてのimmersion programは、僕は非常に面白いのではないかと考えております。

話し合う能力の育成は可能か

甲斐ム 私が今関心を持っているのは、日本人は話し合う能力、いわゆるスピーチや、聞くという音声言語能力を育てることができるかどうかです。日本では昔から、読書という形で、人を避けて自分の密室で人間形成を行ってきました。ところが今では国際化に関連づけて音声言語教育を強調しているわけです。話し合う能力や、自分の考えを口に出して述べる能力の育成について、一方で推進しながら他方で心配しているのですが。

荒木 非常に難しいと思います、私も。というのは、先ほど申し上げたように、そういった共同体の中でわかり合ってきた者達でコミュニケーションが成立していたわけですから、それを自分達と違う文化を持った人達とのコミュニケーションということになりますと、音声の面からそういうことが言えますし。それから、弁論術というものは、実は東大の文化人類学の父といわれた石田英一郎という先生がおられましたけれども、あの先生が、中国まで来てついに日本に達しなかったのは2つあると。1つは鍵の文化であり、1つは雄弁術であると言っておられるわけです。鍵の文化、近頃は少しは持つようになったけれども、ドイツ人がジャラジャラ鍵をたくさん持っているのと比べると、やはり日本にはまだ根付いていない。田舎へ行ったら、戸を閉めておくと機嫌が悪いのです、隣り近所は。戸は開け放しておかないといけない。弁論術というのは、違った意見を持った人を説得することです。声を張り上げて説得するわけですから、これは社交術も同じだと思うのです。日本人は魚心あれば水心とか、黙っていても通じ合うというものがありますから、インターナショナルなパーティーでも、日本人だけ集まってしゃべっている。どうも、出ていってするのは苦手でございます。それがうまくなると、今度は日本人ではなくなるところが出てきて、日本人の美点も同時になくなっていくのではないかという恐れも確かにあるので、その辺のことはやはり何人かの方々が論じあって、いい方法を見いだしていけないと感じております。

水谷 ほんとうに難しいと思うのです。そういう雄弁術、あるいはディベート能力を持った人がもし出ますと、あるいはそれを思考している人がいると、わかっていることについてものを言ったりすれば、あいつは余分なことをやるということになるわけです。だから、そこでそれをいいとするか悪いとするかの物差しを、どう設定できるかがあって、それは、ある意味では多数決の原理が働く面が一つあるから、世の中全体に、本当にみんながどう考えているかというデータと、動かしたとしてどれくらい動いていくか、今これだけのキャンペーンをやり、あるいは教育で何かを強力に進めた場合に、本当に動き得るかどうか目算を立てないと、無駄な主張になるかもしれない気がするのです。今の世の中だから、多数決の方ですと多分、こうしなければとみんなが考えているほどいかない感じがするのですけれど、マスメディアを考えると、きちんと動けばかなり可能性は出てくるのではないかと思うのです。でも、本当に難しいと思います。

荒木 現在の中学、高校、大学で行われている英語教育、これは渡辺昇一さんが言ったことだけ

れど、潜在的な英語を読む力は、ある程度、今の教育で出来ていると思うのです。けれど、顕在的になりますと、大学を卒業して大学院の英文科を出てもろくに喋れないということなのです。だから、この教育のあり方は、やはり中学の英語の教育を含めて、抜本的に変えないとどうにもならないだろうと、僕は考えています。

甲斐ム 先ほど出た、例えばディベートにしましても、例えば本屋に備えられたパソコンで本が何冊刊行されているかを調べますと、なんと何十冊も出ているのです。ただ、そのほとんどがセールスマンのためのものです。ですから説得術が、セールスの方で開発されている。それが日本人全体に及んでくればいいわけですがけれども。あれは商売用だ、日本人は侍なのだというようなことで、線引きが行われてしまいますと、またダメになるのです。そこで、先ほどお話をお伺いして、共同体というとき、そのセールスマンの扱い はどちらに行くのかと、少し心配なのです。

荒木 そういった説得術が、日本の場合はセールスマンの養成としてあるというあり方が、面白いと思います。

日本において話し言葉教育が困難な背景

安 今の文脈から離れるかもしれないのですが、私は、イギリスにおける、日本でいう国語教育に相当する辺りを勉強しているのです。イギリス人も、自分達は話し下手だと思っているそうです。ヨーロッパ大陸と比べてイギリス人は、と思っているらしいのです。それが最近、話し言葉の教育を、日本より10年くらい早いのですが行って、いろいろ教材を開発しているようです。むしろあちらの場合は、それを開発させた動機は、ずっと植民地をたくさん持って、植民地を手放す時代が戦後にありましたが、カラーやブラックがロンドンに入ってくるわけです。その段階で、Language across the curriculumという考え方が出て、全ての教科でも英語が喋れない子がたくさん入ってきたので、教室の傍らで別な先生が教えながら理科や社会をやっているという状況の中で、むしろ話し言葉、通じないから話さなくてはならないという切実とした問題が出て、多少話し言葉の開発の機運が出たということはあったそうです。日本の場合、まだそれほど強烈な、全く違う民族が入ってくるということがないもので、なかなか機会として作りづらい状況にあるのではないかというのが私の感想なのです。あと、いじめの問題。あの国は教科書を見ると、必ず挿し絵に、ホワイトとカラーとブラックの子供たち3人が、図書館で勉強しているところがあります。ホワイトだけ描くと抗議を受けるのです。そういうことが起きない暗黙の伝統的な規律は多少働いているのだろう。ただ日本では、そういうものが働く機会が、村的な発想の中で起きなかったということで、強烈な文化的なカルチャーの、カルチャーショック的な輸入がまだない部分で、なかなか話し言葉も開発も難しいというのが、私の感想であります。その辺で、甲斐雄一郎先生など、何か話し言葉の教材等で御意見を伺えたらと思います。

甲斐ユ 一連のお話を伺ったり、またこの本を読ませていただいたりして感慨深いと思ったのは、荒木先生が中間日本語というものが日本語と英語の間の、それこそ中間に位置づけられるわけですがけれども、中間日本語を必ずしも母国語教育なら教育内容として持っていて、日本人全部がそういうような表現をする事がいいとお考えになっているわけではなくて、そのことを突き詰めていったところには危惧をお感じになっていらっしゃるということに、興味深いものがありました。そうなりますと、言語教育をトータルで考えようとするときに、我々の前には、日本語教育も言語教育だし、国語教育も言語教育だし、英語教育も言語教育だというトータルな見方をしようとするときに、様々なねらいや様々な位相を捉えて、結局その枠組みは枠組みとして、固定したまま考えてい

かざるを得ない側面があるのかという気はしたのです。そうしますと国語教育は、一方では言語教育だけれども、やはり一方では民俗学的に、一國国語教育的に伝統だの文化を育てるために担うという、その両面に足をつっこむことを、今後も進めていくのだろうか、受けとめながら伺っておりました。

水谷 やはりそうだと思うのです。所詮は、ある文化、習慣を持った人達が生きている、そこで使われている言葉が対象であるから、マイナスかという、そうでは多分ないだろう。日本の文化をむしろ守ると、荒木先生はおっしゃったのですが、将来の言語の、ある部分の理想的な何かを内蔵しているというところに、すごく大事なものがあって、日本的なものを徹底的に考えて、意識できて、追求できるということが、ヨーロッパ社会の人達へ貢献する財産になっていく。逆のこともある。英語を学習することの意味は、その意味では、「コーヒーを飲みませんか」ということを習うことではなくて、我々が持っていないものを、彼らの文化の中からどれだけ吸収できるかということに、やはりあるだろうと思うのです。だからやはり、わかれていくのはむしろ逃げないで、中間文化とは恐いところがあって、ハワイや真ん中の位置にあるところで生きている人達の気の毒さをすごく感じるのですけれど、しっかりしたものが大事なのではないのでしょうか。

荒木 日本語の良さというのですか、日本語の対称詞の問題を、一時、国語審議会が、終戦後まもなくらしい昭和28年頃でしょうか、やったときに、「あなた」という言葉は非常にいい言葉だから、今後は対称詞を「あなた」にしようという提言をしたことがあるのです。その後「あなた使うべからず」という、NHKが特集をやりまして、「あなた」という対称詞を、例えば上司に向かって使えるかどうかを聞いて歩いたのです。例えば、内村直也さんのような人は「あなた」という対称詞は非常にいい言葉だから、自分は目上に対しても使うことにしていると言うのですが、ところが、NHKのスタッフに「あなたは、上司に向かってあなたと言えますか」と言ったら、やはり、とても言えないということです。僕はそれを『敬語のジャパノロジー』という本の中で書いてるのですけれど、you というのは選別をしない対称詞なのです。「あなた」というのは、例えば大学紛争のまっただ中、僕はそのころ立命館大学にいたのですが、教室へ行きますと学生がアジ演説をやっているわけです。授業の中でも特に英語の授業が狙われるのです、全員が出ていますから。とにかく授業だから帰れと言う。そうすると、5分でも時間をくださいと。はじめは「先生」と言っているのです。そのうちに、これは俺の貴重な時間だからやれないのだと言ったら、そのうち「あなた」になるのです。「あなたは今の大学教育を一体どう考えているのか。」さらに激してくると、「貴様」となるのです。「貴様のようなのがいるから大学教育は、大学は良くなれないのだ」と言う。つまり「あなた」というのは、選別した結果の対称詞なのです。つまり蔑称、尊称、対等称、蔑称の中の対等称なのです。これは英語のyouとは違うわけです。英語のyouは、呼びかけるときに相手が大統領であろうと乞食であろうとyouなのです。呼びかけの時には、例えば皇族に向かってはYour HighnessやYour Majestyと言いますけれども、そのあとはyouなのです。選別のプロセスを経ないわけです。だから「あなた」を、非常にいい対称詞だから使いなさいという国語審議会のあり方は、非常に僕は間違っていると思うのです。ただyouを「あなた」とは、非常にいい言葉でもある。例えば、これは河盛好蔵さんが書いていたと思うのですけれども、ある思想犯がいて、死刑になる前日に奥さんと会うのです。そして、格子越しに、明日、死刑になる主人と会う。奥さんがI love you.と言うのです。そのとき「私はあなたを愛しています」と訳したらとんでもない話だと。日本語だったら、そのとき恐らく「あなた」という言葉一つだけでいいのだと。そのような「あなた」という言葉は、非常に深い陰と色合いを持った言葉だと思うのです。その辺のことを、やはり日本語を考える場合に考える必要があるのです。実は僕は一度、国語審議会に推薦されたことがあるの

ですけれど、遠いというので否定されました。やはり、外国語が出来る人も国語審議会におりませんと、その辺が間違うのではないかということです。ただ、大和言葉も非常にいい言葉だし、江戸時代に花開いた文化を考えると、日本がインドヨーロッパの文化から切り放されてあった、全く独特な違った文明を開いたのではないだろうか。当時の江戸は世界一の大都市だったそうですが、文盲率も世界一低いといえます。持っているもので、日本的なものの良さを絶対に忘れてはいけないと、僕は思っております。

水谷 この頃、必要があって、国語審議会の報告書を前から見直しているのですが、僕も「あなた」はどうしてしたのだらうと思っていたのですけれど、ものすごい情熱だったのです。戦後の民主主義の発想で徹底的にいった結果、水面の上まで飛び出ってしまったみたいで、他にはわりあい素晴らしいものが結構ありました。「あなた」だけやめておけばよかった。

甲斐△ 『これからの敬語』の中で取り上げていることですね。その中の「あなた」は問題だったけれど、「わたし」は良かったと思います。つまり「わたくし」はよほど改まった場の呼称であって、「わたし」が良くて「ぼく」や「自分」は良くないのだということを書いています。ところが、ここで言っているのですけれど、漢字の「私」には、「わたし」という訓がないのです。漢字の訓は「わたくし」だけですから、自称詞は「わたし」でいい、「わたくし」は丁寧すぎると書いていることが、少し矛盾してくるわけです。

教科としての国語と英語の交流

高木 さっきの異文化対応ということで、immersion programや、そういう話がありますけれども。日本語、国語を使って私達が生きていて、ほぼ同一の民族の中で暮らしているということもあって、先生のご本の言葉で言えば、日本人のような「農耕民族」は、比較的、遊牧民族に比べればお互いに理解し合えるから、ある意味ではファジーな言語でも良かったということがある、と理解できると思うのです。それがこういう国際化の時代になってきて、いやでもその遊牧民系の言語を使っている人達と渡り合っていかなければいけない。そういうときに、例えば明治以降、日本語をやめて英語にしまえ、フランス語にしまえなんてこともありましたが、それはあまり現実的ではないでしょうから、やはり基本的には僕たちは日本語を使い続けていかざるを得ないわけです。そういうときに日本語の持っている農耕民族的な特性を使いながら、その遊牧民と渡り合う時代になったと思うのです。そこで日本語を使っていながら、なおかつ、その国際化に対応していく対応の仕方について何か、もしお考えがあれば少し聞いてみたいと思うのですけれども。例えば中学校からですと、英語と日本語とが両方とも教科として並んでくるわけです。そういう中で、今、現行の学校教育の中では、全く関係のないものとして、独立した科目として設定されているわけですが、それらの中でもっと交流があってもいいのではないかと、教科の中で交流があってもいいのではないかとと思うのですが、そういうことで、何か具体的なお考えがありましたら、お伺いしたいと思うのです。

中間日本語を方便として位置づける

荒木 言語とは、文化そのものですし、文化とは、言語、価値体系、行動様式、習俗の総体をいうわけですから、文化を変えない限り言語は変わってこないと思います。僕はこの『日本語が見えれば英語も見える』の中でも引用したのですが、明治学院大の大津栄一郎という先生が、岩波新書で

『英語の感覚』という本を出されました。あの方は東大の教養学科を卒業されています。東大の教養学科というのは、英語を読むことが商売みたいな学科である。そこを出て何十年か英語を教え、翻訳も出した。翻訳はだいたい岩波文庫から出ているようです。そしてハーバード大学へ1年留学した結果を総括して、自分には英語のコミュニケーションの能力はないということを、正直に言っておられるわけです。そうすると、そのときに食堂であったアメリカ人に、日本人が英語をうまくなるためには、世界観を変えなきゃだめだということを頻りに言ったというのです。しかし、僕に言わせると、世界観を変えるということは大変なことで、文化を変えることです。文化を変えれば言葉は変わるかもしれませんが、英語がうまくなるために世界観を変える必要は一つもないのです。中間日本語は一つの方便だと思うのです。だから我々日本人の文化を、我々が先祖から受け継いできた文化、もちろんその文化に伴う閉鎖性は修正していかなければならないのですけれども、その文化の本質そのものを変える必要は少しもないし、また、変えることは非常に危険であると思います。ただこれからの国際化の時代に向けて、日本人がやはりコミュニケーションの手段として英語を熟達して、多くの人が英語を楽に話せるようになるための一つの方便として、中間日本語を位置付けているわけで、中間日本語がベストだとか、そういった分析的、論理的な思考方法を、今までの日本的なファジーな発想法を変えてそちらを取れということとは、少しも考えていないわけです。

「国語」と「日本語」

高木 それに関係するかどうかと思うのですけれども、もしお考えがあればもう少し具体的にお聞きしたいと思います。「国語」という呼び方でずっと明治以降きたわけですが、この中で先生もさっきおっしゃっていましたが、与謝野晶子氏が「深さ」という言葉をお使いになったことを読みました。「日本語」という言葉を使っているのは、また別の良さもあると思うのです。両方がそれぞれ長所、短所があるのだと思うのです。「日本語」という呼び方としては、「日本語教育」というと外国人子弟を中心にした言葉になってしまいます。かりに「国語」と言っているものについて、「日本語」というふうに、もしそういう名称で、仮に名称だけが違ってしまうということではないだろうと思うのですけれども、もしそうであれば、どのようなことが変わり得たのか、あるいは変わるような場合は、変わり得るということに関して、何かお考えがございましたら、お伺いしたいのですけれども。

荒木 僕は国語の歴史については非常に乏しい知識しか持っておりませんが、その「国語」という言い方で深められた日本語のあり方というのは、これは世界的に見ても非常に大きな成果を挙げていると思うのです。ただ僕が言いたいのは、そういった「国語」という呼び方を否定するわけではなくて、そういった呼び方によって深められた知識の集積があるわけですから、それは当然尊重し、そして大事にしていかなければならないと思うのです。しかしながら、国語を日本語に置き換えることによって、最初から申しましたように、見えてくる部分が間違いなくあると思います。従って、日本語のあり方をいろいろな多角的な方面から、違った視座から見るということは、非常に今後のあり方として大事なことになってくるだろう。是非それは推進していただきたいと考えております。

甲斐△ 実は、第1回のときの結び近くで、「国語」を「日本語」に置き換えようではないかということで、皆さんからいくつもの意見が出てきました。そこでは、日本語教育と国語教育というように、今、内容を分担しているけれども、1つにしたいものだという願いが出ていましたので、今の先生の希望は、我々と一致するように思います。

immersion programが母国語に与える影響

吉田 勉強させてもらってありがとうございました。大変新しい、これからの国語教育の方向性を示すものとして、興味深く聞かせていただきました。細かいところなのですけれども、例えば加藤学園で、低学年から英語でやるというお話を伺ったのですけれども、なぜ低学年なのかというのが、疑問に思った一つです。それからカナダでimmersion programが成功したと先生はおっしゃったのですけれども、構文的に日本語と、カナダという国は違います。そこで日本語の世界と同じ様なことを行った場合、母国語に与える影響はどういうものがあるかということ、少し知りたいと思ったわけです。それから、理科で出てくる、いわゆる学術用語みたいなものがあります。例えば、小学校で教えている「円」とは、こういうものと、ある程度定義を与えて、「円」という日本の言葉を教えているのですけれども、それも全部英語でおこなってしまうのかどうか。それを英語でおこなった場合に、将来的に日本語で、円なら円、三角形なら三角形という言葉が出てきたときに、どういふふうに移し変えるのか。細かいところばかりなのですけれども、もう少し具体的なところが知りたいと思ひまして、教えていただけたらありがたいと思うのですけれども。

荒木 immersion programが低学年からやっているということは、言語の習得、これはいろいろな実験がございまして、13歳以上はあまり効果がないという結果が出ています。それでなるべく幼児期から、英語「を」教えるわけではないわけです。英語を教えるということは非常に危険がある。それから、英語「で」教えるということはどういうことかということ、幼児が言語を習得していくプロセスを観察していると、immersion programで英語を習得してゆくプロセスは、幼児が母親から学ぶプロセスで言葉を覚えていくということなのです。非常に低学年、ことに幼稚園からやる方がいいということが、近頃わかってきたらしいのです。幼稚園児からやろうかと言っております。低学年からやるとはそういうことなのですが、例えばそういった数学や算数の用語の問題ですけれども、これは日常我々はそういうものを円といい、三角形という日本語は使いますし、それを知っているわけです。加藤学園の場合、regular classとimmersion classと、2つに完全に分かれておりまして、そして一定の時期に、両方一緒にして試験をする。日本語でやるのです、試験は。そうすると成績は全然変わらない。むしろimmersionの方が若干よろしいという結果が出ていますということなのです。ただこのことは今後とも、1992年に始まったばかりですので、よく観察をしながら、実験をしながらやらないと。でも私自身もそういうことを、やろうと考えていますので、その場合にカリキュラムのあり方は、やはり算数や数学の専門家、あるいはアメリカやイギリスの専門家ともいろいろ話し合いをしながら、作成をしていかないといけないのではないかと。それから試行錯誤的に、ある程度の見通しは確かについていて、それは非常に効果があるということはわかっておりますから、やり始めていいと思っているわけです。しかしながらある部分については、試行錯誤的なものも確かにありますので、十分に検討しながら、僕もやっていきたいと思ひます。

英語の挨拶

河合 英語教育のさっきのgood morningのところなのですけれども、私たちが学校で教わった英語の挨拶は、ただ普通の、こういうふうには挨拶をするのだよ、だけで終わってしまったのですけれども、英語の挨拶における価値や、いわれをはじめとする、いろいろなものについて、これからの英語教育は、その辺も教えていくのでしょうか？

荒木 そのことを詳しく申し上げますと2時間ぐらいに話になりますけれど、簡単に申し上げます。

つまり、遊家族単位で移動しているわけです。だからそういった基本的な生業経済というものが、今の欧米文化にまで影響を及ぼしているということを前提としなければならないのですけれども、基礎的な遊牧文化を考えると、家族単位で動いていくわけです。それで常に他の遊牧民からの襲撃を覚悟しなくては行けない。つまり全財産を持って歩いているわけですから、彼らは常に武装するわけです。常に、今ならば銃を持って武装するわけです。それから今のアメリカの銃社会というものも、問題がありますけれども、その辺まで考えまないと、なぜ彼らは武装するのかがよくわからない。つまり人を信用しないわけです。信用しないから自分を守るために武装する。そして共同生活をするため、共同で生きていくためには契約を結ぶわけです。だから、契約論理ということ日本人がわからないといいますが、その契約を結びませんと、共同で生きていくことが出来ないので、good morningという挨拶ですけれども、これは1つの社会的な事例です。つまり、会ったらば、Good morning. Good morning! 「いい朝でありますように」と言って別れる。それで、人と人のことが終わってしまうと僕は言っている。つまり、もうそれで右と左に別れていくわけです。日本の場合は、共同体の中で米を作っていますから、早起きというのは絶対的要請としてあるわけです。大牟羅良という方が、反物の行商を5年間くらいやって何万軒という農家をまわってきて、『これが農村の近代化か』という本を岩波新書から出しておられる。それを読むと、農村というものは、とにかく早起きをしないと、みんなから非難されるのです。朝みんなは4時に起きて雨戸を開けるのだ言っているのです。つまり共同で米を作っているということは、村の要請として、共同体の要請としてあるわけです。昔の天明の飢饉では、津軽藩は半分くらい餓死しているわけですから。共同で一生懸命働くということがありますから、早く起きることは村の要請としてあるわけです。だから、お早うございますということ、遅く起きたらそれは皮肉として聞かなければいけませんし、10時頃になればお茶を飲み、それから夕方になればおしまい、これはある意味では、非常にお節な言い方なのです。お休みなさいという言い方もさうだと思のです。英語のGood night.は、いい晩でありますように。これは隣の韓国でも、アンニョンハセヨという、安寧にしてください、安らかにしてくださいということですから、少し日本と違う。日本の場合はかなりお節な言い方なのです、お早うございますや、お休みなさい。何も僕は寝たくないのにお休みなさいといわれる必要はないと言えば、言えるわけです。そういったものが、やはり生業経済としての文化を考えると、挨拶語も理解できるのではないのだろうかと考えているのです。

水谷 前に別れの挨拶ということで、少し言語生活を書いたことがあるのです。そのときに調べてみて感じたことの一つは、例えば英語の挨拶は、相手の祈りがすごく多い。日本語は、祈りというものはない。ところが最近少し変わってきてまして、例えばHave a nice weekendという英語の挨拶があるのです。それは日本へ入らないだろうと思っていたら、7、8年前ぐらいから、テレビで「どうぞいい週末を」と始まって、もうごく今、普通にやるようになってきていますでしょう。だから、そういう挨拶レベルのところまで、もしかしたらさっきの議論がありましたけれど、やはり入り込んできてしまうかもしれない。九九の言い方に、英語の九九のやり方が入るとは思えないですけど、何か非常に具体的な言葉一つ一つの問題も、もう少し広く追求していく必要があります。先生のお話も、本当はそういうところがいっぱいおありなので、たくさん聞けると良かったと今は思っています。

謝辞 おわりのあいさつ

甲斐△ 今日荒木博之先生においでいただいて、非常にいろいろと多方面から教えていただきました。本当に貴重なお話をありがとうございました。

水谷 私ども、これから頑張って勉強をしていくわけですが、力をこれからもお貸しいただけたらと思います。本当にどうもありがとうございました。